令和 5 年 9 月のおたより

千葉で今秋開催される第 17 回 KHJ 全国大会（11/4・土～5・日）の準備が今あわただしく進められています。全国各地から多数の当事者・関係者が集まりますので、会場の手配から段取りまで、地元メンバーは慣れないなか連日連絡を取り合いながら細かい作業に追われています。

プログラム（別紙チラシ参照）２日目の第５分科会では家族会支援と地域連携についての活動報告が行われ、南房総支部・あわの風もその進行役を担っています。ここでの登壇者は、千葉県の総合相談事業「中核地域生活支援センター」の草創期から支援現場の中心的存在として活躍してきた朝比奈ミカさんです。編著者としての出版物も多い中で、よく事例に出てくるのが「氷山モデル」という話。朝比奈さんは、支援者は相談者の背景にある社会的な課題を理解するための視点として、①「表面化している困りごと」（見えやすい部分）と②「困りごとの背後にある個人的・社会的な課題や価値観」（見えにくい部分）の両方に目を向けること。相談者の悩みに向き合うときには、表面化している課題のみに目を向けるのではなく、それを引き起こしている背景の構造にも目を向け、全体像の把握を行い、解決へのアクションをしなければならないとしています。

支援の現場では、社会の変化が速すぎて支援制度が追い付かないという声も上がっています。「毎日、考えたこともないような相談が舞い込んでくる」と。ある相談所によれば、約８割の人が過去に相談した経験を持っていて、そこでの受け止めが十分でなかったり、見立てが相談者のニーズとずれてしまい、問題を解決するという行動が中断してしまい、さらに事態を深刻化させるという結果を招いていることもあります。

制度が追い付かないとしても、せめて人間として寄り添うような支援を目指してもらいたいと多くの相談者は望んでいます。　（K）

記

＜9 月度学習会＞

・日　時：9 月 30 日（土）13：30～（15：30 終了予定）

・会　場：菜の花ホール

・講話：「断らない相談支援と、支え合う関係性の構築を目指して」

・中核地域生活支援センター　コーディネーター：大森　宜広さん

制度の狭間や様々な課題を抱えているなど、地域で生きづらさを感じている方々に対して 24 時間 365 日体制で専門性をもった寄り添い支援を行っているのが千葉県中核地域生活支援センター。その安房圏域を担当する「ひだまり」のこれまでの取組事例を通して見えてきたものを語っていただきます。

・家族懇談会

※当日のご出欠をあらかじめご連絡ください。
090-2335-1338 加藤＝ショートメール可